

作詞 安川誠
作曲 笠木透

「語りこ」

ぐ他心しここすそ戦そ
 らの細まれれるの争こ
 い国くうをかた一をで
 強よ思「戦らめつし、
 いりうと力さのはな今
 も先こいのきも、い度
 のにとう放日の兵よの
 は行はこ棄本は隊う憲
 あっあとに、もに法
 りたりでいはい軍とで
 まのますい、つ艦、は
 せでせ。ま陸さも二日
 ん。んしす軍い飛つ本
 。か。も持行のの
 「世日し「海た機こ国
 の本、放軍なもとが、
 中はみ棄もい、を、
 に正な「空とお決決
 、しさと軍いよめし
 正しいんはもうそまて
 しこは「なご戦し二
 いと、捨いと争た。度
 こを決てのでを
 と、してです。
 てす。

2.
心あこあ
にわれの
刻をだ日
まふけの
れいは先
たて決生
しは
あほて
のえ熱
日た忘っ
のりれぽ
授叫てか
業んはっ
だいた
りかんぞ

「語り」

ちう一つは、よその国と争ひをいごとがおこつたとき、
 決するに、よその国と相手をいごとがおこつたとき、
 ぶだやとお争ひをいごとがおこつたとき、
 おだやかに相談して、いまいうことを決めて、
 なぜなら、いまいうことを決めて、
 国をほろばす、いまいうことを決めて、
 とまはす、いまいうことを決めて、
 こゝろを争ひ、いまいうことを決めて、
 それを戦ふ、いまいうことを決めて、
 そゝし、いまいうことを決めて、
 さういふ友に、いまいうことを決めて、
 さいえに、いまいうことを決めて、

3.
あの子の先生へは
お送涙
あられで
のたて
のので
授だ
業ろ
うた

4.
あの日の先生は
大に声で教科
ほるときな何
心に刻まれた
あ分書の輝いて
のから読んで
のな読んだ
授かってく
業ったけれど

あの日の授業

【作詞】安川誠透
【作曲】

1.

あの日の先生は

輝いて見えた

大きな声で

教科書を

読んでくださった

ほとんど何も

分からなかったけれど

心に刻まれた

あの日の授業

あの日の授業

作詞 笠木 透
作曲 安川 誠

く語りく

「そこで、今度の憲法では日本の国が、決して二度と戦争をしないようにと、二つのことを決めました。その一つは、兵隊も軍艦も飛行機も、およそ戦争をするためのものは、いっさい持たないということです。これからさき日本には、陸軍も海軍も空軍もないのです。これを戦力の放棄といいます。『放棄』とは『捨ててしまう』ということです。しかし、みなさんは、決して心細く思うことはありません。日本は正しいことを、他の国より先に行ったのです。世の中に、正しいことぐらい強いものはありません。

あの日の授業

【作詞】安川 誠
【作曲】笠木 透

2.

あの日の先生は
熱^ねっぽかった
これだけは決して
忘れてはいかんぞ
あわをふいて
ほえたり叫んだり
心に刻まれた
あの日の授業

あの日の授業

【作詞】笠木透
【作曲】安川誠

～語り～

「もう一つは、よその国と争いごとがおこったとき、決して戦争によって、相手を負かして、自分のいいぶんをとおそうとしないということを決めたのです。

おだやかに相談して、決まりをつけようと云うのです。

なぜならば、いくさをしかけることは、結局自分の国をほろぼすようなはめになるからです。また、戦争とまでゆかずとも、
国の力で相手をおどかすようなことは、いっさいしないことに決めたのです。これを戦争の放棄というのです。

そうして、よその国となかよくして、世界中の国がよい友達になっ
てくれるようにすれば
日本の国は
さかえてゆけるのです



あの日の授業

【作詞】笠木透
【作曲】安川誠

3.

あの日の先生は
涙ぐんでいた
教え子を戦場へ
送ってしまった
自らをせめて
おられたのだろう
今ごろ分かった
あの日の授業

あの日の授業

【作詞】安川誠透
【作曲】

4.

あの日の先生は
輝いて見えた
大きな声で教科書を
読んでくださった
ほとんど何も
分からなかったけれど
心に刻まれた
あの日の授業

End